

霊宝館

醍醐寺の敷地内にある博物館である霊宝館は、1935年に仏像、絵画、巻物、国宝に指定されている7万点をこえる文書を安置するために造られました。

博物館に常設展示されているのは、薬と癒しの仏である薬師如来の木造の坐像です。薬師如来への信仰は、仏教が日本に紹介された直後に流行し、信者は病気の救済のために仏に祈りを捧げました。

他にも重要な五大明王の木像があります。これらは、寺院が最初に建てられた場所である上醍醐にある五大堂から霊宝館に移されました。明王は、真言宗では、仏陀、菩薩に続く3番目に重要な位置づけとされています。明王は怒りに満ち、複数の腕を持つものもあり、武器や動物を持っている姿として描写されます。明王は仏教の知恵を表象し、人々の邪悪な欲望を鎮めると言われています。

各明王は方角を表象しています。最も重要なのは、縄と剣を持ち座っている不動明王です。他の4人は、軍荼利明王（南）、大威徳明王（西）、金剛夜叉明王（北）、降三世明王（東）です。大威徳像は平安時代（794-1185）のもので、他の像は江戸時代（1603-1867）初めのものです。